

ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本の キリスト教界の反応と社会福祉史への影響

George Müller, Japanese Christianity, and Social Welfare: A Historical
Analysis of His Footprints in Japan (1886-1887)

木原 活信

KIHARA, Katsunobu

本研究は筆者のイギリスの孤児院の創設者ジョージ・ミュラー研究の一部であるが、本稿では、ミュラーの来日（1886~1887）をめぐる宣教の足跡を明らかにした。それを通してミュラーという人物に当時の日本のキリスト教界がどのように反応し、そして特にキリスト教社会事業家がどのように影響されたのかについて議論した。具体的には新栄教会など東京、横浜の諸教会のミュラーの受け入れに関する経緯、そして同志社でのミュラーの説教内容とその経緯と意義を明らかにした。この説教内容は1889年に新島襄が序文を書き、小冊子『ジョージ・ミュラー氏小伝并演説 信仰の生涯』として発行されたが、それが山室軍平らの社会事業家へ強い影響を与えることになる。これらの事実を残された史資料に基づいて明らかにした。

This article is a part of my research series on George Müller, the founder of the British Orphanage. The purpose of this article is to accurately reveal the footprints of Müller's ministry in Japan (1886-1887) that have not been analyzed so far. We discuss the historical impact of Müller on Japanese Christianity and social welfare, and consequently clarify important historical facts about the acceptance of Müller by Japanese churches at that time.

We also clarify that the content of Müller's sermons given at the Doshisha (its content was published as a booklet) influenced Gunpei Yamamuro and other social

workers in the Meiji era.

序

- I ミュラーの海外巡回宣教と来日の経緯
- II 横浜、東京におけるミュラーの足跡
- III 大阪、神戸におけるミュラーの足跡
- IV 同志社とミュラー
- V 山室軍平とミュラー

結語

注

参考文献

序

イギリスのブリストル孤児院を創設した慈善事業家であり、またキリスト教伝道者でもあったジョージ・ミュラー（George Müller, 1805-1898）に関して、これまで「信仰の偉人」としてその功績を称える偉人伝的な伝記が多く残されていても、必ずしもアカデミックな遡上にはあがってこなかった。しかしながら、そこには研究上においても歴史的価値があると考えられるので、筆者は従来偉人伝の枠を超えて、「ジョージ・ミュラー研究」としてそれをキリスト教福祉、福祉思想史の研究対象として位置づけ、議論をすすめている。これまで既に日本の石井十次への影響（木原1999）、山室軍平への影響（木原1993）、ドイツ敬虔主義との関連（木原2018）、英国の初期ブラザレン運動との関係（木原2019）について明らかにしてきたところである。

それらを踏まえつつ、本稿ではミュラーの1886年～1887年の来日の足跡を実証的に明らかにする。そして受け入れた側の日本の教会の当時の反応、およびその後の社会福祉界とのかかわりに関する全体像を議論していきたい。これらに関連する先行研究として、杉井六郎(1989)「ジョージ・ミュラーと新島襄」(『キリスト教社会問題』)がある。本稿においては、この論文も参照するが、そもそも杉井の研究対象(関心)は、ミュラー自身ではなく、あくまで新島研究あるいは同志社史との関連であり、その文脈で「謎」のように立ち現れるジョージ・ミュラーをめぐる新島襄の対応に焦点をあてたものである。それは新島襄が序文を書いた小冊子『ジョージ・ミューラル氏小伝并演説 信仰の生涯』の刊行にいたる経緯に焦点をあてている。確かに、この小冊子の刊行の経緯により、新島襄からみたミュラー像は明らかになったが、ミュラーの日本での足跡の全体像は杉井自身も認める通りいまだ明らかにされていない。よって本稿ではまずミュラーの日本での足跡と受け入れた側の日本の教会の反応を明らかにし、それを通してミュラーの日本の社会福祉史の影響について議論していくこととする。ただし、今回の研究においては、ミュラーの来日や発信を受けての日本のキリスト教界の当時の反応はその詳細を追ったが、それが時を経てどのように日本のキリスト教全体に受容され、また影響されていったのかに関する思想史的全体像は、紙幅の関係や史料的限界もあり、詳細には論じていない。これは次の課題としたい。

I ジョージ・ミュラーの海外巡回宣教と来日の経緯

1 ミュラーの海外宣教

1875年に70歳を迎えたミュラーは、娘リディア(Lydia, 1832-1890)と義理の息子ライト(James Wright, 1837-1905)夫妻に自らが創設したブリストルの孤児院の運営を委ねて、自らは運営責任から第一線を退き、妻(Susannah)

とともに世界宣教を目的とした伝道者としての第二のキャリア人生の世界巡回伝道旅行に入った (Pierson 1899; Müller 2011; 木原 2018)。これは彼の青年時代の悲願であった。なぜなら「職業牧師」を志して 1825 年当時まだ 20 歳の神学生であったときに「劇的に」回心し、すでにその頃から海外宣教の志が与えられていたからである (木原 2018; 2019)。宣教師として故郷ドイツ (プロシア) からイギリスへと渡ったのであるが、そこで初期のブラザレン運動の中核を担うことになり、むしろキリスト集会の開拓伝道と孤児院運営に半世紀を費やし、当初の海外宣教のビジョンは封印されていたからである (木原 2019)。そして半世紀が過ぎて 70 歳の高齢となり、長年の悲願であった世界宣教のステージに立つことになった。この世界の巡回伝道は 1875 年～1982 年の最晩年までの 17 年間に及ぶことになる。その間、アメリカ、インド、オーストラリア、中国、そして日本など世界 42 か国を訪問した。その足跡は 200,000 マイル (約地球 8 周) に及ぶ世界巡回の宣教旅行であった (George Müller 資料館公式サイト <https://www.mullers.org/>)。現代のように飛行機や高速鉄道がある時代ではなく、船旅、徒歩が移動手段であったこと、また特に日本への訪問は 80 歳を超えての後期高齢期になってからであることも考慮すると、想像を絶するほどの凄まじいエネルギーと行動力である。

ミュラーの宣教精神とその方法は、至ってシンプルであった。それは神の召命により、「招かれたところであるならどこへでも行く」というもので、あらゆる教派性を超えていたのが特徴であった。たとえば、王室、カトリック、聖公会、プロテスタント主流派の教会、団体の大小を問わず福音宣教の大会、家庭集会にいたるまで、聖書をもって福音を伝えに出かけていくという「素朴な」⁽¹⁾姿勢であった。このような姿勢は、バクダットへ宣教に行ったブラザレン運動の源流の一人である義理の兄グローブス (Mary Groves, 1797–1870) から受け継いだフェイス・ミッション (faith mission) の独立型伝道者の姿勢にみられたものであったが、これこそが、生涯ミュラーを貫いた宣教スタイルであっ

ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響
た (Pierson1899; Müller 2011; 木原2018, 2019)。

2 来日の経緯

さて、ミュラーは1886年来日したのであるが、その経緯を知ることはミュラーと当時の日本側のキリスト教界の関係など、これまで不明確であった点や謎を解明する手がかりの一つともなる。一世紀前の日本の教会に残された原資料と当時の諸団体の原資料、記録、そしてイギリスに残されたミュラー資料の点と点を繋いで、能うる限り実証的にその足跡を再現していきたい。今回の海外宣教は全部で16回に及ぶミュラーの第14次伝道旅行にあたる（概ね、ミュラーの海外宣教は半年から1年をかけて船路で世界各国をめぐるものであった）。そしてミュラーのこの第14次伝道旅行は、1885年11月4日にイギリスを発ち、アメリカ、中国、日本、オセアニア諸国などをめぐり1887年の6月13日に帰国する1年7カ月間に及ぶもので、そのうち日本滞在は40日間程度であった。

ところで、そもそもミュラーの招聘にあたって日本側の誰が中心的に動いたのか、あるいはミュラーを日本に紹介した中心人物は誰なのかという点である。実はこれは依然曖昧なままである。通常ならば、世界宣教の各国訪問に際する招聘に関してはミュラー自らが協働者ヘンリー・クレイク (Henry Craik, 1805-1866) とともに1834年に設立させ、その後の孤児事業、宣教事業の支援団体となった聖書知識協会 (The Scriptural Knowledge Institute: 以下 SKI) が中心的に担った。SKI は、ハドソン・テラー (Hudson Taylor, 1832-1905) の支援などで知られているが、現在でも聖書の配布他、海外宣教、慈善事業の働きを支援する国際キリスト教団体組織である。しかし日本の訪問に際して、誰 (あるいはどの団体、教会) と交渉したのか定かではない。彼の「所属母体」であるブラザレン系の「キリスト集会」がミュラー来日をアレンジしていたという事実も確認できない。ブランド (Herbert George Brand, 1865-1942)

は日本最初のブラザレン系の宣教師であるが、ブランド来日は1890（明治23）年であるので、ミュラー来日の2年後である。仮に海外で二人がそれ以前からブラザレンとして交流があったとしても、エクスクルーシヴ派のブランドと、オープン派の流れを汲むミュラーの両者が積極的に交流をもっていたとは考えにくい。この点の詳細の経緯は木原（2019）に詳しいので参照されたい。ミュラーの使用言語はドイツ語と英語であるが、言語から日本にいた宣教師団がミュラーを招聘した可能性も考えられる。「我大坂は本年初週の祈禱会并に彼のジョージ・ミュレル氏の来坂に引続きフルベッキ氏、井深氏等の来坂ありて大に信者未信者を動かしたり」（基督教新聞184号1887年2月2日）と当時の新聞記事にその名の記載があるなど、ミュラー招聘には当時日本で宣教師として、信頼が厚かったフルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898）他、ヘボン（James Curtis Hepburn 1815-1911）、バラ（James Hamilton Ballagh, 1832-1920）、デヴィッド・トンプソン（David Thompson, 1835-1915）らの改革派・長老派の宣教師たちが関東での招聘に主に動いた可能性はある。また関西では組合（会衆）派宣教師のグリーン（Daniel Crosby Greene, 1843-1913）、デーヴィス（Jerome Dean Davis, 1838-1910）、そして新島襄（1843-1890）らが動いたとも考えられるが、それが中心的であったと言えるほどの確定的な証拠はない。

そもそも、既存の組織やルートよりも、教派性を極度に嫌う「ブラザレンの精神」にみられるように神への直接的な信仰的「導き」として、行動するパターンであった可能性も否定できない。それはしばしばミュラーの生涯を貫く典型的な行動パターンにあった。つまり「神の啓示」を受け、それを「導き」として受けとめ、組織としてではなく、使徒時代の弟子たちのように自ら主体的に行動していくというようなものである。

その意味では、アジアの拠点の一つとして日本を自ら宣教地として選び、日本側の特定の仲介者の介在なしに訪れようとしたとも考えられなくはない。し

ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響
かしながら後述するが、滞在した日本の教会等での大規模な講演、通訳、広報
その他のかなり招聘にかかわる組織的な動きをみる限り、仮に信仰的「導き」
といってもそこまで無謀な計画でもなかったことは明らかであろう。イギリス
側の資料からも世界宣教はSKYを中心にある程度計画的に、行動していたこ
とも裏付けられている。

II 横浜、東京におけるミュラーの足跡

さて、以下では時系列的に関東（横浜、東京）、関西（神戸、大阪、京都）
へのミュラーの日本での足跡を中心に議論していきたい。その際、来日にかか
わる記録に関しては、できるだけ解釈を控え、資料原文を引用しつつその足跡
を追っていきたい。

1 ミュラー来日と横浜

ジョージ・ミュラー⁽²⁾の来日の事情について、主に基督教新聞（キリスト教の
伝道、教会の情報交換、文化の啓蒙などを目的に1883（明治16）年8月に創刊
されたプロテスタントの超教派の週間新聞である。現在発行部数約2500。『基
基督教世界』の前身である）に残された記録を照合しつつ、以下実証していきたい。

先述した通り、ジョージ・ミュラーは、70歳で孤児院事業を離れて、妻のス
ザンナとともに世界伝道旅行に出かけるようになった。その一環として、アジ
ア方面、日本、中国を訪問していることはイギリスの記録、ミュラーの残し
た日誌等からも明らかである。先述したように、基本的に各国訪問に際して
ミュラー自らがクレイクとともに設立したSKIが中心的に支援していたのだが、
それにイギリスや海外のブラザレン系のキリスト集会が組織としてどこまで関
与したか、事前にどこまで入念であったかは定かではない。通常、海外諸国の
訪問に際して、特にその宣教に関する情報はSKIから得ていたようであるが、

日本やアジア諸国など、まだそのような海外宣教ネットワークが十分でない場合は組織的にそれが機能していたとも思えない面もある。

日本側の記録によると、来日したのは1886年末。そして翌年の1887年の1月10日に上海へ向けて神戸港から日本を出国するのだが、現時点で厳密に何月何日に日本に入港したのかという正確な期日までは特定できない。1886年12月2日に横浜で（おそらく最初の）講演（説教）をしていることから、残された記録を総合するとミュラーは、その前日の11月末日か12月初日に、横浜港へすでに入港していることになる。

基督教新聞176号（1886年12月8日）では、「去る二日の夜ミュレル氏の横濱にて演説せられし所を聴く⁽³⁾」と記されており、ミュラー来日の当初の様子が見える。この同誌の記事のなかで、ミュラーの人となりと孤児院事業の詳細を一面のトップ記事で伝えていることから当時のキリスト教界において、ジョージ・ミュラーという人物の存在が、日本において既に広く知られており、注目されていた人物であったことが伺える。そして、同誌の「教報」のなかで、以下のように伝えている。

「ジョージ、ミュレル氏は昨日より来京する筈なれば東京の諸教會等に一夜藪寄屋橋教會に曾議を開き同氏を聘し演説奨励等を依頼せんとて其相談をなしたりと云ふ」（基督教新聞1886年12月8日 176号）。つまり、東京の諸教會でミュラーを招いての講演のための組織的な準備会合もたれていることがわかる。藪寄屋橋教會で会合されていることから、また、献金、講演会場などからも、この教會もミュラーの関東訪問での拠点の一つとなっていることがうかがえる（献金の流れは表2参照）。

また同誌では、孤児院のことにつき記載があるとともに、「広報」として、聖書の友年会 主催の講演会が1886年12月10日→同年12月17日に変更したことも告知（基督教新聞1886年12月8日176号）されているが、変更の経緯等は定かでない。

2 東京でのミュラー

基督教新聞177号（1886年12月15日）発行の「教報」によれば、ミュラーの東京での講演に関しては過密なスケジュールが組まれていることが伺える。特に、新栄教会では、同年の12月12日、15日、16日と三回に及んで講演会場になっており、新栄教会が東京訪問において中心的な役割を果たしていることがわかる。（新栄教会とは、1873（明治6）年に設立された東京最初の教会である「東京公会」または「新栄會堂」のことである。後に、新栄橋教会になり、新栄教会になる。現在は、移転して目黒区にある。）この教会は、アメリカ人のデヴィッド・トンプソン（David Thompson, 1835-1915）が宣教師として働いていたが、彼は個人として来日のミュラーへ献金をしたという記録もあり、ミュラー訪日のキーパソンの一人としても考えられる（献金に関しては表2参照）。

また、新栄教会にける講演・説教においては、石本三十郎という人物が通訳をしたと記録されているが、基督教事典等によると、この石本は、1862年12月23日に生まれて1875年にヘボン塾で学び1877年に日本基督公会（現・日本キリスト教会横浜海岸教会）のバラ宣教師より洗礼を受けている。築地大学の英語教師を経て、1891年に明治学院に神学部が新設され、そこで英学、万国史、物理学を教えた。1893年プリンストン大学に留学するが、留学中に腸チフスにかかり、1896年10月11日渡米先で客死する（享年33歳）。石本は当時23歳であったが、通訳の大役を任されていたことになる。

首都圏における講演その他のところでは通訳者が誰であったか、すべての講演の通訳者までは必ずしも明確ではないが、この石本が通訳者として東京方面の集会にのぞんだ可能性は十分考えられる。通常、キリスト教界では、著名な人物を招聘する際に、通訳者が大きな役割をすることが多い。たとえば、救世軍のウィリアム・ブース（William Booth）来日に際しては通訳者の山室軍平が中心的役割を果たしている。

さて、同誌の「教報」では「ミューレル氏の演説」と称して、その一部を以

下のように記している。ミュラーの新栄教会での説教や講演内容が記されており、ミュラーが何を語ったのかを伺い知ることができる。

東京基督諸教会が一致してミューレル氏に演説を願ふことと定りしが其日時ハ左の如し。十二日の日曜午後五時半より築地新栄町五丁目の新栄教会に於てありしものは既に過去となりたるが、当日は実に盛會にて記者の如きハ少しく晩れて馳行しに聴衆の堂外に溢るゝもの何百名と云ふほどにて會堂の狭きを遺憾に思へり。ミューレル氏ハ石本三十郎氏の通弁にて一身の経歴と信仰の幸福を演説せられたり。

○本日即ち十五日ハ午後四時より同じく新栄教会に於てミツシヨン学校男女生徒の爲に演説せらる筈なり○十六日（木曜）ハ同刻同処に於て牧師教師学校教員婦人伝道者、聖書販売人等の爲め○其翌十七日ハ午後六時より木挽町厚生館に於て聖書の友年會の爲め○十九日（日曜）及び其翌廿日の兩日は厚生館に於て孰も午後四時より孤兒院の事に付演説せらるゝ手筈なり（基督教新聞1886年12月15日177号教報）

この記事によると「堂外に溢るゝもの何百名」ということから、いかにミュラーへの関心が寄せられていたのかを知ることができる。ここでは合計3回集會があつたが、それぞれ対象、内容も異なっている。対象は、1) ミツシヨンスクールの生徒、2) 牧師、3) 教師、婦人伝道者、聖書販売人、そして聖書の友の關係者、と記録されている。以下の通り講演内容はそれぞれ異なるが、その共通内容は、「一身の経歴と信仰の幸福を演説」したとなっている。

(1) ミツシヨンスクールの生徒へのメッセージ

以下は、同誌の「教報」に掲載されたミュラーがミツシヨンスクールの生徒たちへ語つた内容を紹介した記事である。以下そのまま引用する。

前号に予報せし通りミューラル氏は去る十五日新栄教会に於てミツシオンに属する男女学校生徒の為に演説し「人幼きときハ虚栄を好みて世の事に幸福を求めんとするものなれども余経験によりて能之を知る。世の事ハ決して真正の幸福を与ものにあらず。真正の幸福ハ唯天父を楽しむに在。余ハ六十一年と六週間之を試して能く知るなり。否な今も猶ほ其を味ひつゝあるものなり。愛する友よ、君等の前途猶ほ遙なり、其途中に於て必ず岐路に迷ふこと勿れ」と父老の其子に諭すが如く身に染様に述べられたり（基督教新聞1886年12月22日178教報）（句読点は筆者追記）

「老師」として日本のミッシヨンスクールの生徒たちへ、自らの経験に基づく信仰の生涯を語り聞かせている内容である。「真正の幸福ハ唯天父を楽しむに在」という境地を「61年と6週間経験」という具体的な数字にこだわる「奇妙な」語り方は、ミュラーの人柄と典型的な語り方が出ている。おそらくこの語り口を聴衆は不思議に思ったであろうが、具体的に「61年6週間」というのは、ミュラーが20歳でキリストに回心して「新生したキリスト者」となってからの年月である。彼の人生は、その前後によってまったく異なっていることを説き続け、自らそれを「実験」と称するまでに生き抜いたことが特徴だからである。いずれにせよ、おそらくこのような語り口はあまり馴染みがなかったであろうが、ミッシヨンスクールの生徒へインパクトが相当にあったことは想像できる。

(2) 牧師たち、教師たちへのメッセージ

牧師たちには、以下のように語る。

「牧師たるものハ宜しく反省すべし。其真に更生（うまれかは）りて死生を神に一任し神の為にすとの一目的を有者ならずば其任に当るに足らず」と云ひ又祈ることと聖書を読むことと及び其教へを身に実行することに付て勸をなし

…」（基督教新聞1886年12月22日178教報）

これはある意味で厳しい勧めである。牧師たちへ単に強い反省を促すだけでなく、真の「更生り」（うまれかわり）（これは回心、新生という意味であろう）を呼び掛けているが、自戒を込めたメッセージであろう。なぜなら、先の筆者の論文（木原2018）でも明らかにしたように、ミュラー自身はドイツのハレ大学神学部で牧師になるべく訓練を受けていたときに実は「新生」しておらず、自ら「本当の」信仰をもっていなかったことを自覚させられた経験をもつ。つまり真に回心していなかった（「更生り〔うまれかわ〕」っていなかった）という自覚こそが彼の信仰の原点であったからである。すでに述べた通り、ミュラーはそれをある夜、ある集会の聖書研究会と祈祷会で経験し、「悔い改めて」「うまれかわり」「61年6週」という歳月が流れたと、ごく自然に語りかけているのである（木原2018）。したがって、通常であれば、牧師に「回心」を求めることなどあり得ない話であるが、ミュラーが敢えてそこに焦点をあてたのは、「職業牧師」から回心して真のキリスト者となったと自覚する自分自身の生涯の反省があってこそその言葉であった。このあたりにミュラーの主張の特徴がみられるとともに、かなり率直に話している様子が伺える。

(3) キリスト教学校の教師たち、キリスト教関係者たちへ

次にキリスト教学校の教師たち、キリスト教関係者たちへは、以下のように述べる。

「凡そ信者が多忙なりとて祈禱と読経を怠るは怪かることなり。例へば余ハ一年に殆ど三万通の手紙を受け、又三万通の手紙を出す。其多忙の甚しきときは九人の書記を置いて猶ほ足らざらんとす。又其中に一千余の信者を養ひ、十有余の学校を支配し、孤児院を有つと雖ども毎日、祈禱と読経を怠たらぬこと猶

は糧を食ふが如し。否此等の事皆読経と祈禱によつて成るものなり。兄弟よ真正の幸福を知らんと欲せば之を實行すべし。基督嘗て其弟子の足を洗ひ「之を行ふ者ハ福なり」と宣へり。行て始て其幸福を知るべし。又何事も謙遜りて誇らず、みな神に榮を帰すべし、余が老の身を忘れつゝ、此の二年を異郷に費し三十余ヶ国を旅し回りて、衆多の人に談すところハ他の義に非ず。神が六十余年の間我身になし給ひし幸福を世界の人に告知し、衆の人をして亦た我如くならしめんとの意のみ。我ハ日々此事の為に神に祈るなり」云々と述べられしが人をして預言者の前に在心地せしめし。

(基督教新聞1886年12月22日178教報) 句読点是一部筆者追記

ここでは、教師たちがいかに多忙であろうと、日々、聖書を読むこと、神に真実に祈ることを徹底するように教えている。これもミュラー自身の体験に基づいて話しているが、一年に3万通もの手紙に返事したエピソード、孤児院を経営し、牧会者(牧師)として千人以上の信徒を養ってきたこと、多忙な中であっても毎日聖書を読むことと祈りを怠らないということが成功の秘訣であったと教えている。また「余が老の身を忘れつゝ、此の二年を異郷に費し三十余ヶ国を旅し回りて」「我如くならしめんとの意のみ、我ハ日々此事の為に神に祈るなり」と述べたのは、日本人的謙遜感覚からすると「不遜」にすら思えるが、「又何事も謙遜りて誇らず、みな神に榮を帰すべし」と堂々と言い切る老師の姿に、新聞記事の反響からすると、その聴衆たちには「預言者」のような迫力すら感じさせたであろう。

(4) 厚生館でのメッセージ

更に基督教新聞によると、1886年12月17日(金)、19日(日)、20日(月)は木挽町厚生館で講演会が開催されている。この会堂は、当時としては大きな会堂で、福澤諭吉と慶應義塾の政治結社グループにより建築された政談演説公会

堂「明治會堂」のことである。1884（明治17）年に「厚生館」へと名称が変わり、当時は一般に「木挽町厚生館」として知られた大規模な講堂であった。基督教新聞178号「教報」1886年12月22日発行の記事によると、19、20日の聴衆はそれぞれ3000人を越えたということであるからその盛会ぶりが伺える。

さらに会堂が、キリスト教会だけでなく、このような大会堂で3000人を集めて講演が行われたことは、ミュラーがキリスト教界の「偉人」だけでなく、当時の日本でも、すでに市民全般にかなり受け入れられていた著名人であったことを示すものであろう。

23日午後3時には、麴町教会「ミュラー先生演説広告」と新聞誌上に全国広告をして、麴町教会でも講演会を実施していることがわかる。麴町教会は、旧長老教会で後に、日本基督教団高輪教会と合併し消滅した長老派の教会のことであろう。ここでわかることは、当時、ミュラーの招聘に積極的に動いたのは、教会の分布図でみると、関東の受け入れの中心は長老派系、そして一部メソジスト系が中心であることがわかる。

記録では、麴町教会での講演が関東で最後となっており、クリスマスを東京で過ごした後、月末の12月27日には関西へ向かっている。基督教新聞179号1886年12月29日（水）では、「ミューラー氏出立 同氏は一昨廿七東京を出立して京都大坂神戸地方へ趣かれたり」と記されているとおりである。

Ⅲ 大阪、神戸におけるミュラー

1886年12月28日（水）よりミュラーは神戸へ入り、関西でも年末年始にかけて活動がはじまる。関西では、神戸→大阪→京都の順に宣教活動をしている。

1 神戸におけるミュラー

基督教新聞179号1886年12月29日（水）によると、「同氏は一昨廿七東京を出

ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響
立して京都大阪神戸地方へ趣かれたり」ということであるが、神戸で関西の最初の講演がなされていることがわかる。また別紙によると、年末年始にかけて「当地にて五回の演説あり」と神戸において都合5回の講演がなされたと記録されている。しかしながら、神戸での講演の詳細記録は、基督教新聞等においても記載が確認できず、現時点でその足跡の詳細は明らかにされていない。

さて年が明けて1887年になり、ミュラーの宣教地が神戸から大阪に移る。ミュラーが帰国した後の、基督教新聞1887年1月26日183号「神戸通信」によると、「○ミューラル先生は去月廿八日来神せられ当地にて五回の演説あり大坂及び京都へも赴かれて数回の演説ありし由なるが何地も大に感動したりと云ふ我神戸の信者に於ても大に感じたればとて其演説筆記を出版せんとする都合なり ○ミューラル氏は去十日夕の便船にて志那上海へ向け出発せらる」となっている。

このことから神戸での5回の講演が「何地も大に感動したり」とあり、盛会であったことを裏付けている。と同時に、ここで気になるのは、「我神戸の信者に於ても大に感じたればとて、其演説筆記を出版せんとする都合なり」（基督教新聞1887年1月26日183号）という記事である。後述するが、京都では同志社での講演を小冊子にして刊行しているが、神戸でも筆記・出版の予定が記載されていたとすると、京都の前にもう一つ神戸での講演録が出ていたことになる。あるいは京都で出版されたので、取りやめたとも考えられるが、少なくとも現時点で、ミュラーの神戸での講演録なる冊子、出版物は見当たらない。

2 大阪でのミュラー

大阪では、大阪基督教青年会（以下大阪YMCA）に招聘されて講演したということが以下の資料から明らかである。『大阪YMCA100年史』に掲載された文章をそのまま引用する。

明治20年（1887）元旦の朝、青年会は祈りをもって開始し、当日午後、府下

教会の信者の親睦会が開かれている。そして、正月5日英国孤児院長ジョージ・ミューラーが来朝し、青年会館で講演会を開いた。この講演会は会館が満員になる程の盛況であった。ミューラーはその翌日も連続で講演をし、自分たちの世界最大といわれる孤児院の事業がどうして成功したか、その中心が、祈祷から生まれた奇蹟であることを立証した。(大阪基督教青年会1982: 53-54)

この記事から、1887年1月5日に青年会館（西区土佐堀2丁目12番地、元長州萩藩の蔵屋敷跡、1886年に献堂）においてミューラーが講演をなし、「この講演会は会館が満員になる程の盛況満員であった」という報告にある通り、東京、横浜での熱狂ぶりは関西でも引き続いた。大阪でのミューラーの講演内容は、「自分たちの世界最大といわれる孤児院の事業がどうして成功したか、その中心が、祈祷から生まれた奇蹟」という記事からすると、その話の内容は、ミューラーの孤児院事業とそれにかかわる自身の信仰の証しについての話であったようである。

天満教会で1885年から牧師に着任していた本間重慶牧師（着任期間：1885～1891年、天満教会の後は神戸教会へ赴任）が大阪 YMCA の働きにも従事しており、関西での働きの仲介をした人物の一人でなかったかと推定される。そして会衆派の天満教会や神戸教会等との関係があったものと推定される。ただし、現時点で、天満教会、神戸教会での講演・説教に関しては、資料からは明確に証拠づけるような記録は明らかではない。この大阪 YMCA では更に翌日の1月6日にも連続講演を行っておりその盛況ぶりが伺える。

横浜、東京においては長老派・改革派、またはメソジスト系の教会が中心であるのに対して、この後の日程での京都（同志社）での講演などをみると、関西では、組合教会（会衆派）や YMCA が受け皿となっていたようである。

IV 同志社（京都）とミュラー

大阪での講演を終えて、京都に入ったミュラーは、同志社に迎えらる。ここが最後の日本での宣教の訪問地ということになった。京都では新島襄を介して同志社が拠点となる。

それでは、ここでのミュラーの講演の中身、つまり具体的には何が語られて、どのような反響であったのであろうか。京都での講演はいずれも同志社で開催され、1887年の1月7日（金）と1月8日（土）と二度にわたった。会場はいずれも献堂されたばかりの同志社礼拝堂であった。同志社礼拝堂は、ミュラー来日の同年1886年に建造され、宣教師 D.C. グリーン（Daniel Crosby Greene, 1843-1913）によって設計され、プロテスタントのチャペルでは現存する日本最古の煉瓦建築で、国の重要文化財にもなっている。同志社教育のために本格的なチャペルの建設を待ち望んでいた新島襄は、定礎式で「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ、又タ精神トナル」（1885.12）と語っているほど新島にとっての待望の場所であった。奇しくも建造されたその年にジョージ・ミュラーというキリスト教界の国際的な大物を招聘したことになり、期せずしてそれがあたかも「こけら落とし」であるかのような講演になった。新島が礼拝堂に込めた願い「同志社ノ基礎トナリ、又タ精神」をミュラーが奇しくも担ったことは偶然とはいえ、実に象徴的でもある。

講演内容は両日でそれぞれテーマが異なり、1887年の1月7日の講演は、「へブル人への手紙」11章7節より「信仰」について、翌日の8日は、「創世記」5章18節～24節のエノクの記事から「神ト偕ニ歩ム」というテーマで語り、聖書に基づく講解説教であった。これは典型的なミュラーの説教スタイルであり、キリスト集会（ブラザレン系）の説教スタイルであったと言える。ここでの聴衆は、主に同志社の学生たちであった。

当時の新聞記事はこの講演について以下のように詳細を伝えており、その内

容についても詳述している。(基督教新聞 182号1887年1月19日「ミューラ氏
京都演説」)

○ミューラ氏京都演説

去七日同志社礼拝堂に於て同氏の演説あり、希伯來書第十一章七節を引き、信仰とは即ち神の語を確信する義にて聖經一部のみか全体に關せり、他の諸徳は枝葉にして之を得ば隨て榮ん云々、次に氏の悔改を話し信仰の増す方法を述べて曰く、神は其子を愛し、其信仰の進むを望み給ふ、夫の艱難離別等も此機回の一部なり、人常に之を好まざれど其必要なること猶慈母の幼児を歩ませて其足を強むるか如し。第二の方法は其心を聖書の啓示と親ふすることなり、熱心なる人をも依頼とせず、直に源泉なる聖書に来て神を研究すべし、余は神の総ての困難より我を救ひ給ふを信ず、故に全心を任せて疑はず、神に任さる人は神を知らざる人なり。第三は信仰上の記録を作て時に之を閲することにて、我経験によれば此益甚た大なるを覚ゆ云々。終りに数多の事業を創成する際、絶えず信仰を〔ママ〕(←と)祈禱を以て神に依頼したり、加之小事に於ても祈禱と*〔ママ〕(←を)常にし、年々歳々幸に幸を積み、六十二年を送り祈禱に由て家族を支へしのみか、妻と共に世界を五週するの費用さへ得たり、冀くは諸君只活ける神に任して活ける信仰を保たれんことをと奨められたり

○翌朝十時の演説は創世記第六章*〔ママ〕(←五章)エノックの信仰に付き神と共に歩むにハ甦生りて神と和らざるを得ず、諸君ハ已に此力を持ど未だ常に變らず神と歩むとハいふ能はざるべし、ロットの生涯を見ても明なり、悔改者のなすべき所は第一全心を神に任すにあり、已に之を任せハ唯一の目的を以て生涯を神に捧ぐべし、畜に一度のみならず毎日之をなすこそ肝要なれ、蓋し我等ハ弱けれハなり云々と述べ、自己の経験に訴へ、伝道のを鼓舞し「余は再び諸君を天国に見ん、其時幸ひに十分の満足を与へよ、満堂の兄弟中一人も欠くることなきを望む」と陳べ終り、繼て熱心なる祈禱ありたり。

ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響

同志には、その講演内容の要約と、81歳の高齢者であるにもかかわらず世界を巡回して伝道旅行をしたミュラーの信仰の姿が紹介されている。すでに東京、横浜で行われた講演会や説教内容とさほど違いはないが、異なる点は、孤児院設立の趣旨や個人的体験よりは聖書講解的要素が強いことであろうか。関西と関東の基督教新聞の紹介の仕方でも目立った差異は見られない。

しかし京都の同志社での講演を決定的なものにしたのは、以下に示す経緯である。それは、このミュラーの講演内容がその後、全文が津田仙主宰の學農社より小冊子『ジョージ・ミューラル氏小伝并演説 信仰の生涯 全』（明治22年）として公刊されたことによる。その経緯について、新島襄が詳細を伝えている。読みづらいが極めて重要な証言でもあるので、正確を期すため一部を除いて原文のママ引用しておきたい。

余曾テ孤児院ヲ英国ブリストル府ニ創設シ芳名ヲ世界ニ轟カシタル、ジョージ・ミューラル氏ガ堅確ナル信仰ノ生涯ヲ聞キ、心口窃カニ欽羨ノ情ニ堪ヘズ。一たび氏ニ面接シ其ノ実験スル所ヲ聞カント希望スル茲ニ二年アリ、然ルニ奚ソ図ラン。

皇天上帝幸ニ良縁ヲ吾人ニ與ヘ、氏ヲシテ世界漫遊ノ途路、今春我カ日本ニ来航セシメ、特ニ脚ヲ京都ニ扨ケシメ、我カ同志社英学校ニ来ラシメ、曰ク信仰曰ク神與吾共歩スノ二題ヲ以テ其ノ自ラ多年辛苦經歷スル所ノ事蹟ヲ証明シ、懇々切々吾人ニ告ケシムル事アラントハ嗟乎是豈ニ独リ余ノ幸慶ナランヤ。又タ我カ校ノ一大慶幸ト云フヘキナリ。然ハ則チ吾人之ヲ天恵ト云ハスシテ何ソヤ。

此頃我カ校中ノ二三子、氏ノ説教ヲ筆記シ之ヲ編纂シテ一冊子トナシ同好ノ友ニ頒タント欲シ余ニ一言ノ序ヲ求メラル。余之ヲ把テ読ムニ氏ガ確乎不拔ノ信仰、醇正無私ノ目的、沈重廉潔ノ品格、積誠至愛ノ行為、歴然文外ニ顯ハレ余ヲシテ再ヒ彼ノ自髮嘖々タル老師ノ音容ニ接スルカ如キ感ヲ起サシメ、益其

ノ風采ヲ欽慕シ其高德ヲ讚嘆シテ止マザラシム。

夫レ氏ハ素ト射利求名ノ一書生タリ。而シテ神靈一度ヒ其ノ心ヲ動スヤ翻然其目的ヲ一變シ、爾來茲ニ六十有余年ノ久シキ、一挙手一投足ト雖トモ皆尽ク天意ヲ奉戴シ人生ノ福祉ヲ進歩スルニ出テサルハナシ、今ヤ其齡ヒ已ニ八十二年ヲ超過スルモ矍鑠トシテ尚ホ壯図アルモノノ如ク剛毅直行世界ヲ周遊シ侃々真理ノ証ヲ為シテ止マサルニ至ル。何ソ夫レ此ノ如ク盛ナルヤ。

嗟呼此人ニシテ此信アリ、此信アリ而シテ後克ク此善美ナル偉業ヲ為スヘキナリ、乃チ聊カ所感ヲ書シテ以テ諸子ノ需メヲ充ス。

明治二十年六月

新島 襄識

〔上欄外注〕

一篇ノ文章堅確ナル信仰ノ文字ニ起リ、此信アリノ信字ニ終ル、結得有力、有精神 鹿友拝評

基本は原文のままであるが、旧漢字を常用漢字し、原文にある傍点等は略し、読みやすさを配慮して句読点を適時筆者が追記している)

新島の説明によると、「孤児院ヲ英国ブリストル府ニ創設シ芳名ヲ世界ニ轟カシタル、ジョージ・ミュラー氏」とあるが、すでにキリスト教界では世界的に著名人であったミュラーについて兼ねてより面談を切望していたとされるが、新島がアメリカ在任時代当時からミュラーの名前をすでに知っていたのか、それとも帰国後知ったのかどうかは定かでない。

いずれにせよ、新島の「心口竅カニ欽羨ノ情ニ堪ヘズ、一タビ氏ニ面接シ其ノ実験スル所ヲ聞カント希望スル」という、表現からすると兼ねてより相当にミュラーという人物に関心を抱き、面会を切望していたことが伺える。そして何としてもジョージ・ミュラーという偉大な人物を「今春我カ日本ニ来航セシメ、特ニ脚ヲ京都ニ拄ケシメ、我カ同志社英学校ニ来ラシメ」とあるように、同志社に招き入れ、若き学生たちに「堅確ナル信仰ノ生涯」を模範として学んでも

raitaiという牧師としてあるいは学校長としての新島襄の率直な思いが伺える。ミュラーの熱烈な信仰によって同志社の若き学生の魂にキリスト教信仰の火を焚きつけたいという思いがあったのであろう。

本小冊子の末尾には、発行主幹の津田仙が以下のように結んでいる。それによると、「京都にて為したる同演説を今回同志社古賀鶴次郎及長谷川専太郎両氏が携来りて梓に上せんとするに臨み余をして之に跋せしむるに至る余の欣喜知るべきなり即ち之を書して以て同胞兄弟を示すと云爾 明治二十二年三月」となっている。つまり、当時の同志社英学校の学生であった古賀と長谷川の両学生がこの講演や小冊子にかかわっていたことを裏付けている。通訳には新島や宣教師団ではなく、この二人がかかわっている可能性がある。杉井六郎(1989)によると、古賀は、福岡県御笠郡筒井村出身で当時英学校の2年生、長谷川は京都下京区三十組材木町出身で、英学校の3年生であるという。

いずれにせよ、新島は、学生の要望に応じて、この同志社でのミュラーの講演を会場で聞くことができなかった人々にもこの講演での臨場感を再現したいと講演録としてこの小冊子を作成したというのである。これらの経緯からすると、それほどミュラーに心酔し、その信仰の態度に傾倒していることが伺えるわけであるが、一方で当の同志社の学生たちや教師たちすべてが、ミュラーの信仰に対して新島と同じ思いであったとは思えない。19世紀末には当時すでに日本にも欧米流の新神学が流布し、特に同志社では新島の弟子たち、小崎弘道、金森通倫、海老名弾正、また熊本バンドの面々はその強い影響を受けていた。当然ではあるが、ミュラーの孤児院の慈善事業の愛他精神には賛同しても、そのような新神学とは真逆とも言えるミュラーの保守的、伝統的な聖書理解、キリスト教信仰・信条には懐疑的であったはずである。それでありながらも新島がそのような文脈で、ミュラーを敢えて同志社に招き入れようとし、なおかつそれを印刷物として残そうとした意図も伝わってくる。「嗟乎是豈ニ独り余ノ幸慶ナランヤ、又タ我カ校ノ一大慶幸ト云フヘキナリ、然ハ則チ吾人之ヲ天恵ト

云ハスシテ何ソヤ」という表現に示される通りである。しかし、そのような当時の状況からすれば、果たして新島が言う通り、「我カ校ノ一大慶幸」として同志社の教員や学生たちすべてが素直にこれを受け入れていたかは少々疑問である。

この3年後に新島は亡くなるが、当時、同志社の学生であった山室軍平は、新神学を説く金森通倫や海老名弾正らの新神学を主導する同志社の先輩たちと激しく対立していた（木原1993）。結果的に山室がそれゆえに同志社退学を決意するほどであったからである。これらのことから、その同志社における新神学の影響は、ミュラー、新島、山室といういわゆる「キリスト教保守派」の系譜に対抗して既に主流派として存在していたことを示しているからである。このあたりの山室側の経緯については木原（1993）に詳しいが、新神学を主導する側からみた分析は稿を改めて議論することとする。

V 山室軍平とミュラー

さて、新島襄が招聘をすすめて、その結果を小冊子として印刷媒体に残したことは、不思議な方法で、日本の福祉界へ影響を与えていくことになる。それは、当時はまだ同志社の学生ではなく、その会場にはいなかった「家出少年」として東京で活版工の労働者として働いていた山室軍平が手にすることになったことによる。これが山室の同志社への入学、新島襄への弟子入りを決断させる一冊になったのである。

その後、この小冊子は、昭和10（1935）年11月に、山室軍平が非売品として、本書のリバイバルを込めて出版する。出版社は不二家書房である。先の新島襄の巻頭言は、今回は平仮名混じりに改められ、内容は同じであるが、当時一般に読まれていた文体に整理されている。このような小冊子を復刻すること自体異例ではあるが、それほどまでに山室がミュラーに傾倒していたこ

ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響と、そしてミュラーの講演内容が昭和初期の動乱時代に重要なメッセージであり、それが日本に対して影響を与えると確信していたからであろう。復刻に際して、そこにミュラーと青年山室の「出会い」を認めているのが有名な以下の一文である。これは山室の人生の方向転換の起点を示しており、極めて重要な文章である。以下そのまま全文を掲載しておく。

巻末に題す

明治二十二年、私がまだ十八歳の青年であつた頃、私はこの「信仰の生涯」といふ小冊子を読んで、いたく感動し、一部手に入れたいと思つたが、買ふ金がないので之を手写し、爾來数ヶ月間、毎日数回、之を読んでは神に祈り、復読んでは復神に祈り、遂にジョージ・ミュラーを助くる神が、また私をも助け給ふといふ信仰を得て、それを頼りに東京から京都に出掛け、一文なしではあつたが、無理なことをして、それでも不思議に、数年間の苦学を続けるやうになつた始末は、拙著『私の青年時代』に、述べて置いた通りである。この小冊子が、私の信仰生活に及ぼした影響は、至つて大なるものがあつた。

岡山孤児院の石井十次君は又、この小冊子に記されたと同じ説教の聞書、その友人から贈られたのを読んで感奮し、愈々孤児教育の事業に、身を抛つべき決心を堅うせられたのである。いふ迄もなく、それよりも更に精しい筆記が、この小冊子に由つて紹介せられてからは、之を愛読して、その信仰上大なる助を得られたのである。現に同年の夏、私が始めて君（筆者注：石井十次のこと）を孤児院に訪問した時にも、その居室にこの小冊子が置いてあつたのを、明かに記憶して居る。而してそれが、石井君と彼の事業とに与へた感化は、少なくなかつたことを信ずるのである。

固よりミュラーの、神に祈りはしても、人には訴へないといふ主義は、救世軍のやり口とは、聊か趣を異にする所がある。「天は自ら助くる者を助ける。」といふ諺もある通、私共は何をさし措いても、万事を神に訴へる。けれ共それ

と同時に、また私共に出来る限の事を行つて、せいぜい自ら助けることを力めるのである。この点に於て救世軍の流儀は、必ずしも全然ミューラーの主義と、同じでない所があるやうに感ぜられる。けれども要するに、二つながら、一切の事を神に委ね、その指導^{みちびき}を信じ、その御力によつて、之を処理して行く段になつては、其の間に何等の相違があらうとも思はれない。私は十八歳の当時、ミューラーの模範によつて、信仰の祈の如何に力あるかを学んだ。その通を今日も胸に銘し、身に経験せんことを、絶えず努めて居たるやうな次第である。

この小冊子は、明治二十二年の四月、津田仙氏主宰の学農社にて、出版せられ、爾來久しく絶版となつて居つたものであるが、仙氏没後、其の後を嗣がれた次郎氏は、いつぞや私にむかひ、「君が若し『信仰の生涯』を、今一度出版したいなら、僕が同意するから、差支ないよ。」といはれたのである。さうした厚意を思ひ出でつゝ、折柄私の救世軍に従軍の、満四十年を迎へんとするに当り、友人林源十郎、和田操、両君の親切なる賛助により、此の小冊子を非売品として、部数を限り印刷し、主なる戦友諸君に差出すことにしたわけは、一つには自分が多年前、この小冊子によつてうけた祝福を感謝する為であると共に、一つには又、戦友諸君が之によつて、信仰上得る所あられんことを、願ふが為に他ならない。御祝福諸君の上に在らんことを祈る。

昭和十年十一月三日

山室軍平

* 山室（1935：31-34）引用は原文ママであるが、旧漢字は現代漢字に改めた。

山室軍平が、これを1935（昭和10）年に再発行（復刻）を決断した理由は、「この小冊子によつてうけた祝福を感謝する為であると共に、一つには、又、戦友諸君が之によつて、信仰上得る所あられんことを、願ふが為に他ならない」と述べる通り、自ら青年期の人生の転機、生涯の秘訣となつたミューラーの金言の説教であつたことを認めるとともに、是非、それを救世軍の若い後輩たちへも

共有しなかったというのであろう。とはいうもの、流石にこの当時すでに当時山室は年齢63歳であり、日本の救世軍を背負う立場でもあり、その立場も考慮して、「固よりミュラーの、神に祈りはしても、人には訴へないといふ主義は、救世軍のやり口とは、聊か趣を異にする所がある」と率直に述べつつ、ミュラーの考えに全面的に入れ込んでいないわけではないことも表明して、その立場の線引きはしている。

1935年は、すでに日本がファシズム化していた時代にあり、キリスト教界にとっても暗黒の時代の幕開けであり、太平洋戦争の動乱へむかう危機の時代であったことからすると、ますますその試練の時代にあっても、「私は十八歳の当時、ミュラーの模範によつて、信仰の祈の如何に力あるかを学んだ。その通を今日も胸に銘し、身に経験せんことを、絶えず努めて居たるやうな次第である」と述べる通り、その信仰の教えの必要を広めることを痛感したのであろう。

結語

基督教新聞183号1887年1月26日「神戸通信」によると、「ミューラル氏は去十日夕の便船にて志那上海へ向け出発せらる」とある。

それによると、ミュラーは、神戸港より1887年1月10日に上海へ出港していく。1886年の12月初頭に横浜港に入港してから、およそ40日間に及ぶ日本宣教となった。ミュラーにしてみれば、日本は世界宣教42か国を訪問したうちのあくまで一つの国ではあったが、論じてきたように、その足跡を丹念に追っていくと、そのミッションにおいてなされた宣教結果がもたらしたものは、単なる40日間に過ぎないとは言えないほどの影響を後に残すことになったと言える。ミュラー自身が想定していた成果を遥かに超えて、日本の社会福祉界に重大な転機をもたらすことになった。なかでも同志社での説教の影響は甚大である。

日本滞在でのミュラーの説教や講演は、ブラザレン派の「キリスト集会」という「セクト」の牧師ではなく、「一人のキリスト者（兄弟）」として自らの経

験に基づく信仰の生涯の祝福を聖書に照らして明らかにしたのが特徴であった。「招かれたところなら何処にでも行く」という宣教姿勢であったが、日本で語られた講演内容は、決して特異なものではなく、主に聖書、信仰、祈り、という素朴なキリスト教のオーソドックスな内容であった。そして論じてきょうに、1887年1月に建設したばかりの同志社礼拝堂の講壇にたち、同志社の若き学生たちへ「信仰」について熱弁をふるったその説教が、その後、思わぬところで大きな反響を呼ぶことになった。これが、2年後に出版された小冊子『ジョージ・ミュラー氏小伝并演説 信仰の生涯』であり、この小冊子が、日本の三大社会事業家と言われる青年であった山室軍平、石井十次へ福祉への召命を促す甚大なる影響を及ぼしたのである。当時10代の青年であった山室はミュラーの影響で同志社を経て、救世軍を通して「日本の社会事業の父」として、社会の最底辺にある廃娼問題、貧困問題の先駆をなしていく。また石井十次は、「日本のミュラーにならん」として孤児事業を通して日本の「児童福祉の父」として孤児院事業の先駆者となっていく。こうして、期せずして山室軍平、石井十次らを通して、ミュラーの実践と思想は、日本の社会福祉史の本流のなかに立ち現れていくことになった。そのように考えると、本来日本の社会福祉とはまったく無関係なように見えるジョージ・ミュラーという人物とその来日の足跡が、人知れず日本の社会福祉の思想形成に計り知れないほどの影響を与えていくのは、不思議な「神の見えざる手」としかいいようのない縁えにしだったのかもしれない。

本稿ではミュラーの日本での足跡とそれを受け入れた日本の教会の反応を実証的に明らかにすることができた。そしてそれを通してミュラーの日本の社会福祉史の影響について山室軍平より明らかにした。しかし、ミュラーの来日や発信を受けての日本のキリスト教界の当時の反応は明示できたが、それが時を経てどのように受容され（あるいは批判され）、また影響されていったのかに関する全体像は、紙幅の関係や史料の限界もあり、詳細には論じていない。これは次の課題としたい。

注

- (1) 「プリマス・ブラザレン」、あるいは「プレズレン」と表記されるが、本稿では「ブラザレン」と表記する。
- (2) 日本での表記はミューラル、ミュレール、ミュラーなどと表記上の揺れがみられるが、本稿では、原文引用に際しては原文ママとし、それ以外は「ミュラー」と表記する。
- (3) 基督教新聞の引用に際して原文ママとするが一部の旧漢字等は現行漢字に改めるなど旧字体は現行の新字体に改めている。

参考文献

Baylis, Robert (1995) *My people: the story of those people sometimes called Plymouth Brethren*, Canada: Gospel Folio Press.

Broadbent, Edmund Hamer (1931) *The Pilgrim Church*, London: Pickering & Inslis LTD.

Coad, F. Roy (2001) *A History of the Brethren Movement: Its Origins, Its Worldwide Development and Its Significance for the Present Day*, Vancouver: Regent College Publishing.

Dann, Robert Bernard (2009) *Father of Faith Missions: The Life and Times of Anthony Norris Groves*, U.S.: Authentic Media.

Dowley, Tim ed. (1977) *The History of Christianity*, England: Lion publishing.

池田次郎吉 (1889) 『ジョージ・ミュラー氏小伝并演説 信仰の生涯 全』學農社.

George Müller org 公式サイト <https://www.georgeMüller.org/> (2020.7.1. 閲覧)

George Müller 資料館公式サイト <https://www.Müllers.org/> (2020.7.1. 閲覧)

Grass, Tim (2006) *Gathering to His Name: the Story of Open Brethren in Britain and Ireland*, London: Paternoster Press.

木原活信 (1993) 「同志社のアイロニー —山室軍平の中途退学—」『新島研究』第82号.

木原活信 (1999) 「ジョージ・ミュラーが石井十次に及ぼした影響」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋出版.

木原活信 (2018) 「ジョージ・ミュラーの思想形成におけるフランケの敬虔主義の影響について」『評論・社会科学』(127) 1-17.

『基督教新聞』(1886; 1887) 176号~183号.

Müller, George (2011) *The George Müller Collection : Autobiography; Answer to Prayer: Counsel to Christians; Preaching Tours and Missionary Labours*, Kindle Edition.

Müller, George (1996) *The Autobiography of George Müller*, Mass Market Paperback.

(Originally Entitled, “The Life of Trust: Being a Narrative of the Lord's Dealings with George Müller”).

Müller, George (2017) *Answers to Prayer*, Paperback A.E.C. Brooks.

Neatby, W.B. (1901) *A History of the Plymouth Brethren*, London: Hodder and Stoughton.

大阪基督教青年会 (1982) 『大阪 YMCA100年史』.

Pierson, Arthur Tappan (1899) *George Müller of Bristol*, London: James Nisbet & Co.

Smith, Nathan Delynn (1986) *Roots, Renewal and the Brethren*, California: Hope Publishing House.

杉井六郎 (1989) 「ジョージ・ミュラーと新島襄」『キリスト教社会問題研究』第37号.

Steer, Roger (1997) *George Müller: Delighted in God*. Tain, Rosshire: Christian Focus.

山室軍平編修 (復刻版) (1935) 『ジョージ・ミューラー氏小伝并演説 信仰の生涯』不二屋書房 = 池田次郎吉1889 (字体改め、山室の解題あり).

山室軍平 (1929) 『私の青年時代』救世軍出版及供給部.

The Brethren Archivists and Historians Network (BHAN) 公式サイト <http://brethrenhistory.org/home.htm> (2020.8.1. 閲覧).

The Scriptural Knowledge Institution (SKY) 公式サイト <https://www.Mullers.org/> (2020.8.1. 閲覧).

The University of Manchester Library, “Christian Brethren Archive” 公式サイト <https://www.library.manchester.ac.uk/search-resources/special-collections/guide-to-special-collections/christian-brethren-collections/> (2020.8.1. 閲覧).

* なお、本研究は JSPS 科研費 JP19H01601 の助成を受けています。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP19H01601.

表1 ミュラー来日の足跡

1886年12月		
		横浜港入港
2日(木)	夜	横浜にて講演
3日(金)		「孤児院について」(談)
12日(日)	5時半～	新栄教会 通訳/石本三十郎「一身の経歴と信仰の幸い」
15日(水)	午後4時	新栄教会 ミッション学校の男女生徒
16日(木)	午後4時	新栄教会 牧師、教師、学校教員、婦人伝道者、聖書販売人
17日(金)	午後6時より	木挽町厚生館 聖書の友会主催
19日(日)	午後4時より	厚生館 「孤児院のこと」
20日(月)	午後4時より	厚生館 「孤児院のこと」 3000人
23日(木)	午後3時	麹町教会
27日(月)		東京発つ
28日(火)		神戸へ
1887年1月		
		神戸で5回講演と記録あり
5日(水)		大阪 YMCA 青年会館 連続講演
6日(木)		大阪 YMCA 〃
7日(金)		同志社礼拝堂 「信仰」へブル11章7節
8日(土)	午前10時	同志社礼拝堂 「神ト偕ニ歩ム」創世記5章
10日(月)		船便で上海へ発つ

表2 日本の諸教会等のミュラーの講演にかかわる献金・経費一覧

ミュラー氏演説會費出納表	
金二圓	聖保羅教會
金一圓	臺町教會
金三圓	爾國教會
金一圓	番町教會
金〇五拾錢	藪寄屋橋教會
金一圓五拾錢	麹町教會
金一圓廿錢	元太工町教會
金三圓	日本美以美教會
金一圓	西芝教會
金六十五錢	下谷美以美教會
金一圓〇圓錢	築地四番教會
金七十錢	タムソン ⁽¹⁾ 氏贈 別會費有餘金

金一圓	芝教會
金一圓	本所一致 ⁽²⁾ 教會
金一圓	三一教會
金一圓五拾錢	立教教會
金一圓五拾錢	青山教會
金一圓五拾錢	中橋教會
金一圓卅錢	中六番町教會
金二十錢	江藤義資
金一圓	本郷教會 ⁽³⁾
金一圓四拾錢	新榮教會
金一圓五拾錢	新橋教會
合 計	三拾圓七拾五錢

支 出	
金十圓	厚生館席料
金五圓五十六錢	五大新聞廣告料
金三圓五十錢	下足人足二日ニテ十人
金二圓四十四錢八厘	蠟燭薪油代
金五十五錢	端書 五十五枚
金三圓三十錢	切符四千九百五十枚端書五十枚印刷洋紙代共使人足人力
金二圓六十錢	車西ノ内紙雜費
合 計	二十七圓九十五錢八厘
差 引	金二圓七十九錢二厘 過上

出典 基督教新聞 1886年12月29日 179号 広告欄より作成

- (1) David Thompson (1835 - 1915) とと思われる。
- (2) 本所教会のことか？
- (3) 日本基督本郷教会 (1878年設立) または日本組合本郷教会 (1886年設立) が考えられる。しかし他の多くの教会が基督教会に属していたこと、また、『弓町本郷教会百年史』によると、「草創当時は、本郷教会ではなく博愛館の名称であった」(919頁)とあり、これらを鑑み、ここでは日本基督本郷教会と思われる。

(第20期第1研究会による成果)